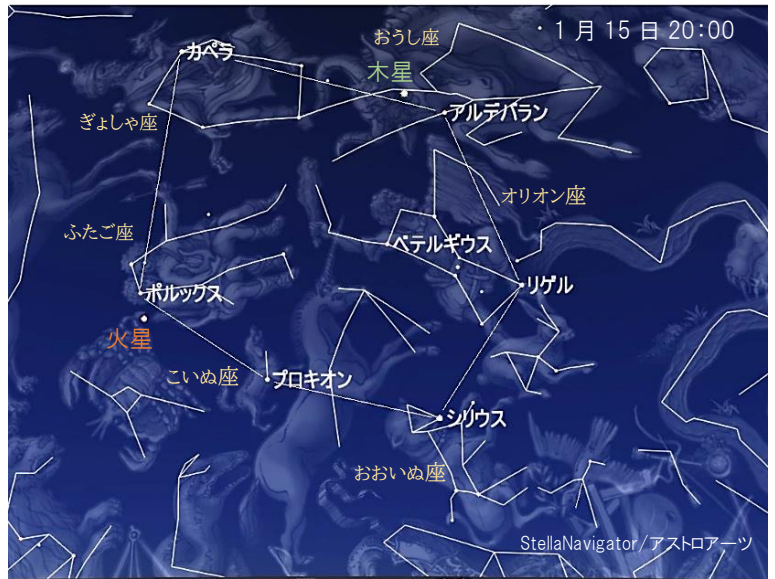


### ★今月の星もよう★

冬は全天で21個ある1等星が最も多く登場する季節で、空気が澄んでいるため美しい星空を見ることができます。まずは、冬の夜空の目玉「冬のダイヤモンド」をご紹介します。夜8時頃、南東の空を見上げると、2等星の明るい星が3つ並んでいるのが目につきます。この3つ星は狩人の姿をした「オリオン座」のベルト部分です。オリオン座の右肩には1等星のベテルギウス、左足には1等星リゲルが輝いており、ベテルギウスを中心に、リゲルから明るい1等星をたどって時計の反対回りに星を探してみると、おおいぬ座のシリウス、こいぬ座のプロキオン、ふたご座のポルックス、ぎょしゃ座のカペラ、おうし座のアルデバランと6つの1等星を見つけることができます。これらを結んだ六角形が「冬のダイヤモンド」です。今年はさらに、太陽系で一番大きな惑星・木星がアルデバランの付近に、地球に最接近中の火星がポルックスの近くに輝き、冬のダイヤモンドをより派手やかにしています。防寒対策をして冬の夜空を楽しんでみましょう。

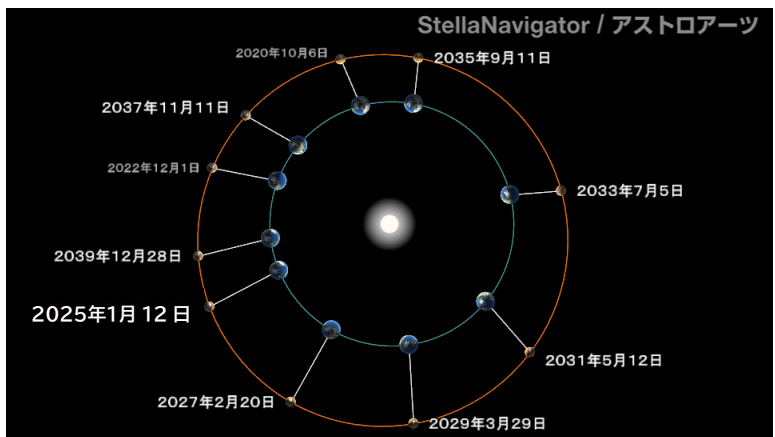


### ★火星が地球に接近★

1月12日、火星が地球に約2年2か月ぶりに接近し、通常より明るく大きい姿が見られます。

火星や地球など太陽系の惑星は太陽を中心に公転していますが、それぞれの周期や軌道は異なるため、惑星同士の距離はいつも変化しています。地球は365日周期で公転し、火星は地球の外側を687日周期で公転しているため、地球が約2年2か月ごとに火星を追い抜き、太陽から見て地球と火星が同じ方向になる頃に、両惑星は最接近するのです。

今回の接近では火星と地球の距離は約9,608万km。2035年9月11日には約5,691万kmも近づき「大接近」となります。上図のように接近時の距離が毎回異なるのは、両惑星の周期の違いが約2か月分の端数がある上、火星の軌道が楕円形になっているためです。次の2027年2月の接近時には1億142万kmとさらに距離が遠くなってしまいますので、今回の機会にぜひ火星を観察してみましょう。

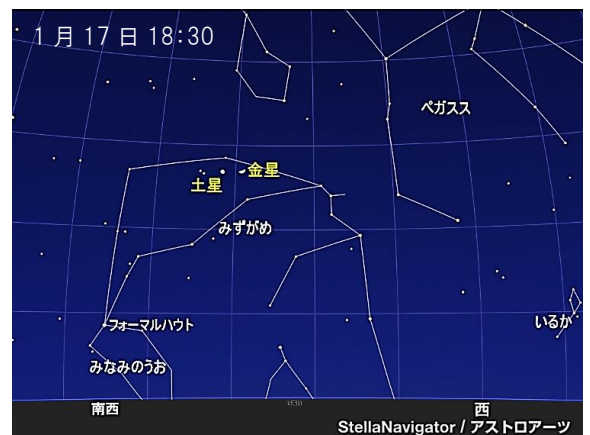


### ★金星と土星の接近★

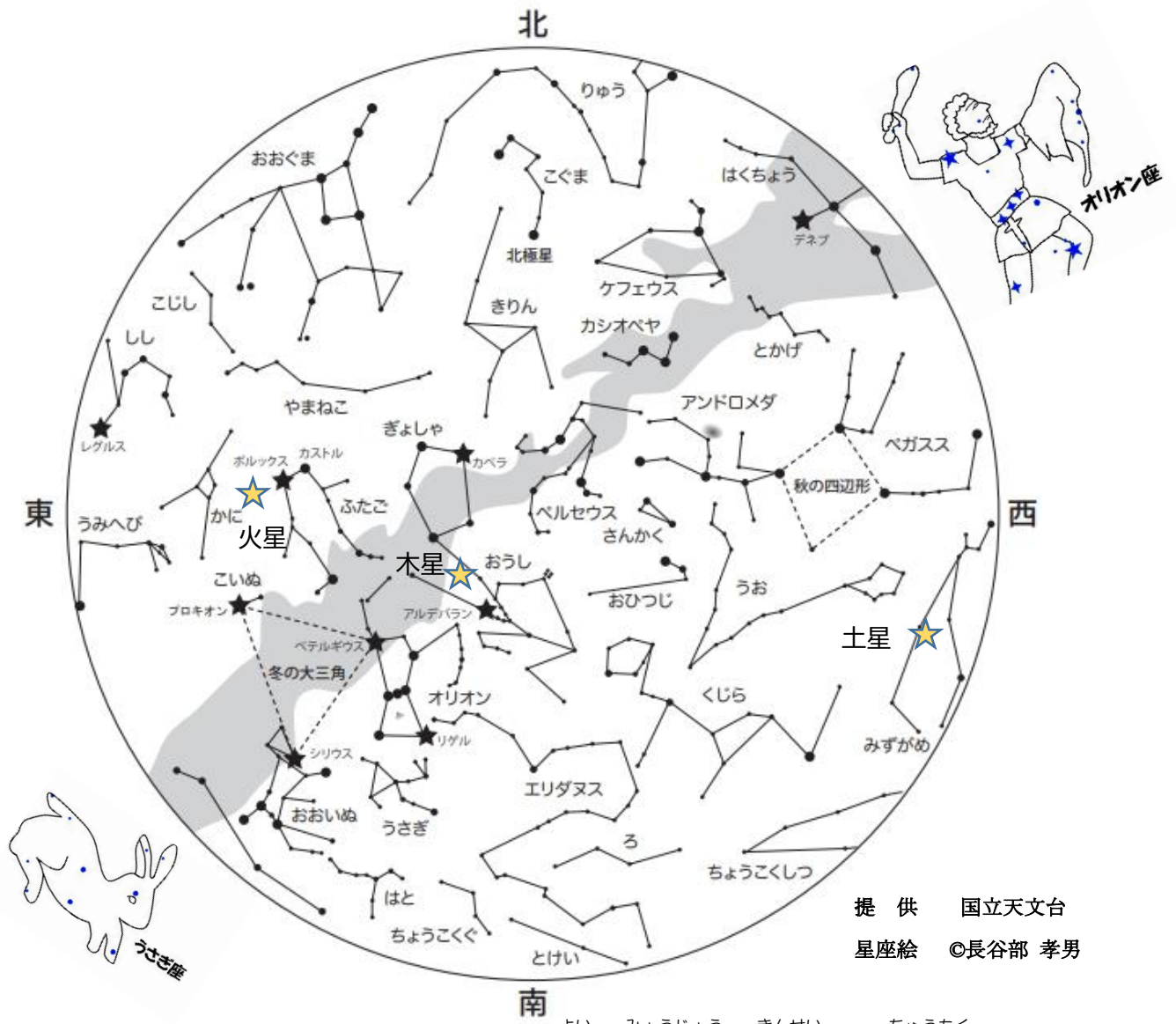
日没後、西の空に見える金星は次第に高度を上げていき、18日には土星と約2度の距離に接近します。10日に東方最大離角を迎えた金星は-4.5等と明るく輝き、環の消失を間近にひかえた土星は1.1等で輝いて、2つの星が並んだ姿を肉眼で見ることができます。双眼鏡でも同一視野にとらえる事ができそうです。さらに双眼鏡を三脚に固定すれば、金星、土星ともにその形を確認できるかもしれません。

☆プラネタリウムの内容については、別刷りの「投影案内」をご覧ください

☆プラネタリウムのお休み 1/1(水)~4(土)、6(月)、14(火)、15(水)、20(月)、27(月)



# 1月中旬 午後8時頃の星空

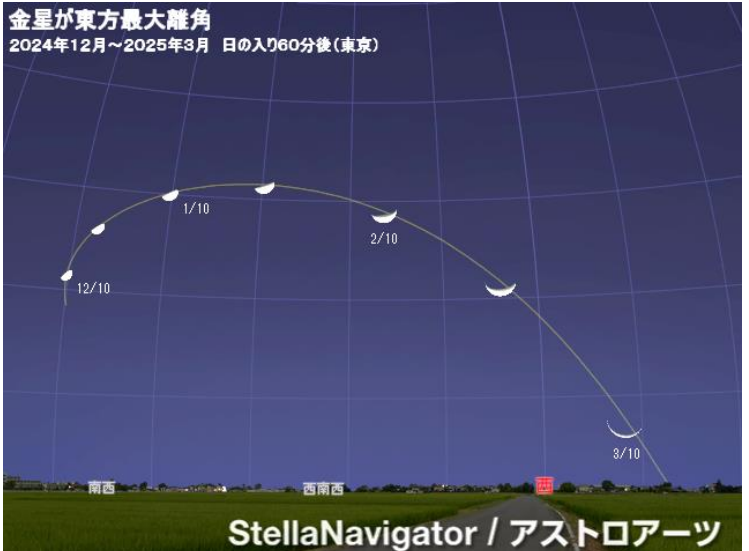


提供 国立天文台  
星座絵 ©長谷部 孝男

## ★ 1月の主な天文現象 ★

## 宵の明星「金星」に注目

金星が10日に東方最大離角を迎え、3月上旬まで金星の満ち欠けの変化を観察する好機となっています。ぜひ望遠鏡で観察してみてください。



- 4日(土) しぶんぎ座流星群極大
- 7日(火) ● 上弦
- 10日(金) 金星が東方最大離角
- 12日(日) 火星が地球に最接近
- 14日(火) ● 満月
- 16日(木) 火星が衝
- 22日(水) ● 下弦
- 29日(水) ● 新月
- 31日(金) 天王星が留